

富山高等専門学校射水キャンパス⁽¹⁾におけるロシア語教育の現状と課題

山本 有希
宮崎 衣澄

はじめに

富山高等専門学校射水キャンパスでは、日本海側に位置するという地域の特徴を生かし、隣国の言語であるロシア語、中国語、韓国語の科目を開講している。学生達は、第2外国語としてロシア語・中国語・韓国語(以下、環日本海諸国語⁽²⁾)から1言語を選択して履修する。高等学校でも大学でもない、高等専門学校でのロシア語教育はどのように行われてきたのか、そして現在どのような問題を抱えているのかを明らかにするとともに、今後の課題について述べていきたい。最初に国際ビジネス学科の学生を対象とするロシア語教育について述べ、次に電子情報工学科および商船学科の学生に対するロシア語教育について述べていく。

1. 富山高等専門学校射水キャンパス

富山高等専門学校は、2009年に富山商船高等専門学校(射水市海老江 以下、富山商船高専)と富山工業高等専門学校(富山市本郷)の統合により、2キャンパスを擁する高等専門学校として新たなスタートを切った。富山商船高専を母体とした射水キャンパスには、電子情報工学科、国際ビジネス学科、商船学科及び専攻科がそれぞれ設置された。2014年4月1日現在、射水キャンパスには708名の学生が在籍している。

(1) 本稿では、富山高等専門学校全体を指す場合には「本校」、射水キャンパスを指す場合には「射水キャンパス」としている。

(2) 本校の科目課程表では、ロシア語、中国語、韓国語を「環日本海諸国語」としている。

2. 国際ビジネス学科の概要

2.1 国際ビジネス学科について

富山県は古くからロシアと関わりが古く、富山県とロシア沿海州は 1992 年に友好提携を締結している。その後、中古車貿易が活発となり、1993 年に伏木—ウラジオストク間に定期貨客船が、1994 年に富山—ウラジオストク間に定期航空便がそれぞれ就航し、多数のロシア人が富山を訪れていた。このような事情から、地方都市としてはロシア人定住者の割合が高い⁽³⁾という特徴がある。近年では、ロシアの中古車輸入規制に伴って利用者が減少したため、船も飛行機も運休状態だが、隣国であるロシアへの関心は依然として高い。

富山商船高専では、確認できる限り 1967 年から第 2 外国語としてロシア語講座が開講されている⁽⁴⁾。また、県内には県立伏木高等学校、県立志貴野高等学校など、ロシア語講座を開講している高等学校があり、上記の地域性を反映したものであると言える。

このような環境の中、富山県や当時の新湊市(現射水市)など自治体の応援を得て、1996 年、富山商船高専に国際ビジネス学科の前身となる国際流通学科が設置された。「語学と異文化についての知識を有し、世界の舞台で活躍できる人材を輩出する」ことを目標の 1 つに掲げ、高等専門学校では珍しい人文系学科⁽⁵⁾が誕生したのである。その後、2009 年の統合により、学科名称及びカリキュラムの一部を変更し、2010 年 4 月より新学科生の受け入れを開始した。

射水キャンパスを卒業した学生の進路は、半数が進学(大学の 3 年次への編入)、半数が就職である。ロシア語学習を目的とした進学先としては、富山大学、大阪大学、上智大学などの実績がある。また、県内にはロシアをビジネスパートナーとしている企業があり、このような企業への就職実績もある。

(3) 「富山県多文化共生推進プラン(改訂版)」P.2 (2012)

(4) 学校便覧で確認できたのは 1967 年までであった。

(5) 他にも、宇部工業高等専門学校経営情報学科、福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科がある。

2.2 教育プログラムの特徴

国際ビジネス学科のロシア語教育の特徴は、1)少人数教育、2)5年間一貫教育、3)ロシアにおける短期語学留学制度の3点である。以下、各特徴について紹介する。

2.2.1 少人数教育と5年間一貫教育

高等専門学校での1学科定員は40名である。その40名が環日本海諸国語の3言語に分かれて受講するため、受講者数は15人前後となり、非常に恵まれた環境である。今年度4月現在の受講者数は、5年生10名、4年生10名、3年生14名、2年生8名、1年生15名である。

学生は自分で選択した言語を5年間学習する。環日本海諸国語は、課程科目表においては一般科目と専門科目に分けられているが、同一言語を5年間学習するという意味では、専門科目と同じ位置づけであると言える。

学生は、入学後に実施されるオリエンテーション期間を経て学習する言語を選択する。このオリエンテーションは、環日本海諸国語を担当する3人の教員が交替でそれぞれ3回ずつ、合計9回の授業を行う。環日本海諸国語の授業は週2回なので、この期間は1ヶ月以上に渡る。少しでも早く本格的な授業に入りたいところであるが、学生には慎重な選択が求められるため、このように長い期間を設けている。オリエンテーションでは、3言語がそれぞれどのような特徴を持ち、どのように授業が行われていくのかを学生に示している。

2.2.2 ロシアにおける短期留学制度

これは科目名を「環日本海諸国異文化実習」とする短期留学制度である。2000年から⁽⁶⁾開始され、ロシア沿海州の州都ウラジオストクにて、夏季休業期間中に4週間の予定で実施している。目的は、語学能力向上と異文化理解の促進である。参加対象者は3年生以上の希望者としている。

2003年にはSARSの流行により実施が見送られたが、翌年再開されて現在まで継続されている。2000年から2006年の間は極東国立大学(現極東連邦総合大学)で、

⁽⁶⁾ これより以前の期間は、ロシア極東連邦総合大学函館校(北海道函館市)で実施していた。

2007年から現在まではニエヴェルスコイ海洋国立大学国際部附属語学センター(以下、海洋大学)にて実施している。

環日本海諸国異文化実習に参加する学生たちには、出発前にネイティブの非常勤講師による事前講習(10時間程度)を受講することを義務付けている。放課後を利用し、会話表現の練習に重点を置いた課外学習として実施している。

表1は今年度の日程表である。学生は同大学の学生寮で生活し、平日は毎日ロシア語授業を受ける。午後や休日にはウラジオストクの名所旧跡を訪れ、ウラジオストクの歴史や文化に触れている。異文化実習の最後には到達度を測る試験が実施される。学生は学習の成果を試し実習修了となる。現地に到着した当初は不安と緊張に包まれていた学生も、しっかりとロシアでの生活を満喫して帰国している。今年度は8名の3年生が参加した。4.5年生も参加可能だが、インターンシップや就職活動、卒業研究等で多忙であり、3年次に参加する学生が多い。

図1,2は海洋大学での授業の様子である。少人数でロシア人教員からきめ細かい指導を受けている。日本で受けている授業と違い、ロシア語のみで行われる授業は学生に緊張を強いるが、それは始めのうちだけである。ロシアでの留學生活は、本来彼らが持っているコミュニケーション能力を最大限に引き出してくれる。一方で特筆すべきは、学生が普段当然と思っている日本での生活環境に対して、感謝の念を抱くようになることである。急速に豊かになっているロシアだが、日本同様の生活を送るというわけにはいかない。ロシアで自律した生活を送り、様々な「不自由」⁽⁷⁾を体験することで、初めて自分が恵まれた環境にいることに気がつくのである。これは学生の人間形成において大きな意味があると考えている。

⁽⁷⁾ これは学生が感じる「不自由」であり、その多くは集団生活に起因するものや、インターネット環境が期待していたほど良くなかったという程度の「不自由」である。

表 1. H26 年度環日本海諸国異文化実習日程表

平成 26 年度 富山高等専門学校 ロシア研修日程(案)

	月日		午前	午後	
第一週	8/10	日	7:50 富山空港集合 8:20 富山空港発(ANA884) 9:25 羽田空港着、成田へ移動 13:55 成田空港発(S7 566 便)	18:35 ウラジ'オストク空港着、 大学へ移動、 留学生寮入寮、夕食	
	8/11	月	8:30 朝食 9:30 ミーティング、 11:15-12:45 ロシア語授業①	13:00 昼食、14:00 両替等 18:00 夕食	
	8/12	火	9:30-12:45 ロシア語授業②	14:00 在ウラジ'オストク 日本総領事館訪問(案)	
	8/13	水	9:30-12:45 ロシア語授業③	市内見学	
	8/14	木	9:30-12:45 ロシア語授業④	自由時間	
	8/15	金	9:30-12:45 ロシア語授業⑤	市内見学	
	8/16	土	植物園		
第二週	8/17	日	自由時間		
	8/18	月	9:30-12:45 ロシア語授業⑥	市内見学	
	8/19	火	9:30-12:45 ロシア語授業⑦	市内見学	
	8/20	水	9:30-12:45 ロシア語授業⑧	市内見学	
	8/21	木	9:30-12:45 ロシア語授業⑨	自由時間	
	8/22	金	9:30-12:45 ロシア語授業⑩	市内見学	
	8/23	土	灯台ピクニック		
第三週	8/24	日	自由時間		
	8/25	月	9:30-12:45 ロシア語授業⑪	市内見学	
	8/26	火	9:30-12:45 ロシア語授業⑫	市内見学	
	8/27	水	9:30-12:45 ロシア語授業⑬	市内見学	
	8/28	木	9:30-12:45 ロシア語授業⑭	自由時間	
	8/29	金	9:30-12:45 ロシア語授業⑮	市内見学	
	8/30	土	沿海地方観光		
第四週	8/31	日	自由時間		
	9/1	月	9:30-12:45 ロシア語授業⑯	市内見学	
	9/2	火	9:30-12:45 ロシア語授業⑰	市内見学	
	9/3	水	9:30-12:45 ロシア語試験	市内見学	
	9/4	木	9:30-12:45 ロシア語試験	自由時間	
	9/5	金	9:30-11:00 アンケート 11:15-12:45 修了証書授与式	14:00 送別食事会	
	9/6	土	自由時間		
第五週	9/7	日	10:30 寮出発 13:00 ウラジ'オストク空港発 (S7 565 便)	13:05 成田空港着、羽田空港へ 18:25 羽田空港発(ANA889) 19:25 富山空港着	



図 1 授業の様子



図 2 ペアワークの様子

3. 課外活動

3.1 ロシア語能力検定

本校では、知識・技能審査単位制度を設け、資格試験の受験を奨励している。これは対象となる資格試験に合格し申請をすることによって、所定の単位が付与されるというものである。ロシア語の場合は、ロシア語能力検定がこれに該当する。ロシア語能力検定 3 級合格の場合は 1 単位、2 級あるいは 1 級合格の場合は 2 単位が付与される。受験する学生は自主的に検定の勉強に取り組んでいる。2013 年度の合格実績は、2 級合格者 2 名、3 級合格者 3 名であった。

3.2 ロシア語スピーチコンテスト in 富山

これは毎年秋に、富山市で開催される国際交流フェスティバルとの共催で実施されているスピーチコンテストである。富山県の国際交流員を務めるロシア人スタッフが企画・運営し、今年で 8 回目を迎える。コンテストは、指定されたテキストを朗読する朗読部門、3 分以内のスピーチをするスピーチ一般部門、3 分以内のスピーチをした後、審査員からの質問を受けるスピーチ上級部門の 3 部門が用意され、県内各地から様々な年代のロシア語学習者が参加している。日頃の学習成果を発表するだけでなく、同じようにロシア語を学んでいる仲間と交流できる素晴らしい機会である。また、自分の能力に応じて参加することができるため、在学中にすべての部門に参加する学生もいる。今年度、射水キャンパスからは朗読部門に 2 年生 5 名、スピーチ一般部門に 3 年生 1 名が参加する予定である。入賞できなくても、コンテストという場でロシア語を話すという経

験は、学生に大きな達成感をもたらし、その後の学習への意欲が高まるため、今後も参加を奨励していくつもりである。

4. 授業科目の概要

表 2 は国際ビジネス学科の開講科目と使用教科書、および学習時間数を表したものである。一般科目は正字体で、専門科目はイタリック体で示した。()内の数字は単位数を表している。前述の通り、5 年間学習するため単位数は多く、一般科目と専門科目を合わせて 28 単位である。環日本海諸国異文化実習は 3 年生以上が履修可能だが、5 年次に一括して単位認定されるため、5 年次の単位として記載した。なお、4.5 年次の学習時間数が単位数に比して少ないのは、学修単位によるものである。5 年間の学習時間数が 600 時間⁽⁸⁾となることを考慮し、5 年間のロシア語到達目標として、ロシア語検定 3 級の取得と、「外国人のためのロシア語検定試験」(以下 ТРКИ)の基礎レベル(ТБУ)～第 1 レベル(ТРКИ-1)を目標としている。教科書は「Дорога в Россию」のシリーズを使用し、低学年対象の一般科目は主として山本が、高学年対象の専門科目は宮崎が担当し、一部専門科目はロシア人非常勤講師が担当している。

表 2. 国際ビジネス学科授業概要 (1 学習時間=50 分)

学年	科目名	使用教科書	学習時間数
1	環日本海諸国語 I (2)、II (2)	«Дорога в Россию.1»	120
2	環日本海諸国語 III (4)		120
3	環日本海諸国語 IV (4)	«Дорога в Россию.2»	120
	環日本海諸国語演習 I (1)、II (1)		60
4	※環日本海諸国語演習 III (2) 環日本海諸国語表現 I (1)、II (1) ※環日本海諸国語表現 III (2)	«Дорога в Россию.3.1»	120
5	※ビジネス環日本海諸国語(2) ※時事環日本海諸国語(2) 環日本海諸国異文化実習(4)	«Дорога в Россию.3.1»	60 ⁽⁹⁾

5. 国際ビジネス学科におけるロシア語教育の今後の課題

⁽⁸⁾ 第 1 レベル (ТРКИ-1) の必要学習時間は、440-460 学習時間以上とされている。

⁽⁹⁾ 環日本海諸国異文化実習は希望者のみの参加であるため、学習時間数には含んでいない。

5.1 全国 6 言語アンケート調査が示したもの

全国 6 言語アンケート調査⁽¹⁰⁾(以下、アンケート)は、6 言語の学習者と教員を対象として、2012 年度に実施された大規模な学習に対する意識調査である。射水キャンパスもロシア語部門の調査である「ロシア語とロシア語学習に対する意識調査」に参加⁽¹¹⁾した。このアンケート結果が示したロシア語教育の課題を以下に述べていきたい。なおアンケート結果の分析については、すでに報告しているため、ここでは概要を述べるにとどめる[山本・宮崎 2012]。

5.1.1 ロシア語勉強している理由

「なぜロシア語を勉強しているのか」という質問に関しては、英語以外の外国語学習に対する積極性を示す項目と、学科の規定のために履修しているとする消極性を示す項目が同様に高い数値を示していることが特徴的であった。また将来の自分の仕事あるいは研究に必要なだと思うと感じている者が多かったが、これは地域性が影響していると考えられる。

5.1.2 英語学習とロシア語学習に対する意識の比較

英語学習との比較では、学生は英語学習についてもロシア語学習についても難しいと感じていると同時に、テストでよい点を取ることを重要だと認識していることがわかった。本校には年に 4 回の試験があり、その都度クラス内の成績順位が通知される。長期留学の選考や、就職・進学といった進路選択の際には、クラス順位が指標の 1 つになるため、学生達は順位に敏感である。これは大学生とは異なる、高等専門学校あるいは高等学校特有の事情であると言えよう。

また英語と比較すると、ロシア語については自主学習が難しく、ロシア語ができるようになってからも将来自分がしたいことの役には立たないと感じていることがわかった。これは

⁽¹⁰⁾ 本アンケートは JSPS 科研費「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究」(研究代表: 西山教行、基盤研究 A)の一環として 2012 年度に実施されたものである。

⁽¹¹⁾ 本調査結果の分析は JSPS 科研費「大学間、高等学校－大学間ロシア語教育ネットワークの確立」(研究代表: 林田理恵、基盤研究 B)の一環として行い、その結果は同科研の 2012 年度研究成果報告書[林田他 2012]の[山本・宮崎 2012](37-44)にまとめられている。詳しくはこちらを参照されたい。なお、この調査の対象としたのは国際ビジネス学科の学生のみである。

現在の学習がづらい上に、将来にも希望を持ってないということを示しており、とても深刻な状況である。これは射水キャンパスの学生だけでなく、ロシア語学習者の全体的な傾向であることが報告されている[宮本・横井・林田 2014]。

5.1.3 英語以外の外国語学習とその選択理由

5.1.1 で述べたように、学生は英語以外の外国語学習の必要性を強く認識している。その理由については、回答の 7 割が実用性で 3 割が知的好奇心であった。これはロシア語受講者の 7 割が実用性を理由にロシア語選択を決めたと考えられるが、自己の経験ではなく、一般的な話として回答しているとも捉えることもでき、決定的な傾向とは言えないのは残念である。

5.1.4 ロシア語の授業について

2.2.1 で述べたように、国際ビジネス学科のロシア語授業は少人数で行われる。そのため学生の口頭練習の機会が多く、また質問も気軽にできるためか、授業については満足度が高い。その反面、学習事項をマスターできているとは思えないと感じている学生が多いことがわかった。マスターできているという感覚には個人差があり、一様ではない。一般的に学習を開始した頃は、比較的小さな進歩で喜びを感じることができるが、学習が進行していく過程では、努力を伴わなければ達成感を得ることは難しくなる。学習期間が長期間に渡るという利点が、ともすると長期間の学習にも関わらずマスターできないといった無力感へとつながりかねない様子が垣間見える。

5.2 アンケート結果のまとめ

アンケートから、国際ビジネス学科の学生は、実用性や知的好奇心によってロシア語を選択し、恵まれた環境で行われている授業に概ね満足していることがわかった。しかしロシア語は難しくマスターできるとも、将来自分の役に立つとも考えられないでいる。また授業が楽しくても、将来性を感じられないために、強い負担感を覚えている。他方で良い成績を取ることを重要視しているので、テスト前は頑張って勉強するが、日常的な自律的学習には向かわないのが実情である。まさにこの状況が、私達のロシア語教育が抱えている問題である。

成績に敏感な学生は、与えられた課題には対応する。しかしそれはやはり与えられ

たものであり、自ら進んで学習するという姿勢とは異なる。では、学生に自律的・能動的な学習姿勢を持たせるためにはどうしたらよいのだろうか。この問いに対して、大阪大学の「ロシア語中級クラス」における試みは大きな示唆を与えてくれる[林田 2013]。これは、学習者の専門性にリンクした内容を教材に盛り込むことで、学習者に学習の意義を認識させて自発的学習態度を引き出すというものである。大阪大学のケースをそのまま持ち込むことはできないが、専門性をキーワードとして、新たな教材の開発を模索していきたい。

6. 到達度テストの結果が示したもの

6.1 到達度テストの実施

2012年10月～11月にわたって、国際ビジネス学科3年生のロシア語選択者10名を対象として到達度テストを実施した。4で述べた到達目標に対して、3年生の段階における達成度を測ることが目的であった。3年生を対象としたのは、この学年が国際ビジネス学科の1期生であり、今後の学習計画作成の参考とするためであった。

試験はТРКИの基礎レベル(ТБУ)の過去問題から、学生の既習事項を抽出するという形で作成した。実施した分野は語彙・文法、長文読解、作文である。この結果についてもすでに報告しているので、ここでは概要を述べるだけとする[山本・宮崎 2012]。

6.2 到達度テストの結果と今後の課題

結果は、長文読解については力不足を感じるものの、語彙・文法及び作文の分野では概ね満足できるというものだった。到達目標に対する達成度としては、3年生秋の時点では基礎レベル到達に少し及ばない段階であることがわかった。とはいえ年度途中の実施であることを考慮すると、全体としては3年生の到達目標にほぼ達していると考えられるものであった。同時に、長文読解に時間がかかりすぎる、語彙力および応用能力が不足していることが明らかになった。

長文読解は宿題として課すことが多く、学生は限られた時間の中で読解に取り組むという作業に慣れていないと考えられる。対策としては、授業の中に長文読解を取り入れていくことがあげられる。その際に5.2で述べたように、学習者の専門性にリンクしたテキストを用いることができれば、学習者が知的的好奇心を持って読解に取り組むことが期待できる。学習者の年齢や知的レベルに応じたテキストの作成に向かって教材研究

を進めていきたいと考えている。

一方語彙については、単語テストを頻繁に実施することで語彙の定着を図っているが、明らかな効果としては現れていない。語彙の定着のためには反復練習を続けることが必要だが、同じ単語について何回も単語テストができるような時間的余裕がないのが現状である。

このような状況の改善として、上で述べたような学習者が興味を持って取り組めるような読解用テキストと、定着させたい語彙を連動させることで、より効果的な読解力と語彙力の向上を図るという方向性を模索していきたい。

6.3 到達度テストのまとめ

到達度テストの実施により、学生の現状を数値で認識することができ、ロシア語教育における問題や課題が明らかになった。今後も定期的に到達度テストを実施し、客観的に到達度を把握して、より効果的な授業計画を策定していくことが重要である。時間や人的資源の確保といった問題があるが、私達が置かれている実情に見合った実施方法を模索していきたい。

7. 「理系⁽¹²⁾」学生の第2外国語

7.1 「理系」学生を対象とした環日本海諸国語の概要

射水キャンパスでは、現在、電子情報工学科および商船学科の4、5年が環日本海諸国語(3単位)を履修している。3年次後期に履修言語を希望により選択し、4年次から授業を開始する。2014年度のロシア語受講者数は、5年生20名、4年生27名である。教科書は「ТЕРЕМОК (テレモーク)⁽¹³⁾」初級編を、ワークブックとして「МОЯ ТЕТРАДЬ по русскому языку (私のロシア語ノート)」を使用している。簡潔な内容と親しみやすいイラストにより、学生には好評である。

7.2 「理系」学生の選択動機

表3は4年生の第1回授業で実施した選択動機調査の結果である。出席者26名

(12) ここでいう「理系」学生とは電子情報工学科および商船学科の学生を指す

(13) 「ロシア語教材『ТЕРЕМОК』テレモーク」、「МОЯ ТЕТРАДЬ по русскому языку (私のロシア語ノート)」北海道教育委員会生涯学習部生涯学習推進局生涯学習課(2007)

の内、回答者 22 名、無回答者 4 名であった。設問は「なぜロシア語を選択したのですか?」とした。この調査を実施した理由は、消去法で選択している学生がどの程度いるのか知りたかったからである。これまで「理系」対象の環日本海諸国語では、中国語と韓国語を希望する学生が多く、ロシア語だけが極端に少ないという状況が続いていた。ところが現在の 4.5 年生、つまり統合後の 1 期生、2 期生に関しては、各言語の受講者数が概ね全体の 3 分の 1 ずつとなった。急にロシア語選択者が増加した理由が消去法による選択ではないかと予想され、調査したものである。予想に反して、様々な回答があり興味深い結果であった。また、調査対象となった学生が語学選択調査を受けたのがソチオリンピック(2014)前だったので、オリンピックをきっかけに興味を持った学生が多いのではないかとこの予想もしたが、選択理由にオリンピックを挙げた学生はいなかった。

表 3 選択動機調査結果『なぜロシア語を選択したのですか?』 表 4 「興味の内訳」

選択理由	(人)		興味の内訳	(人)
興味	18	→	一般的興味	4
将来性	2		行ってみたい	2
消去法で選択	7		ロシア人との交流体験	2
友人に誘われた	4		ロシア文化・ロシア語との接触	3
計	31		友人の影響	2
			ロシア語のイメージから (歌、マンガ、ツイッター)	4
			その他	1
			計	18

回答者 22 名/26 名(複数回答)

表 3 の通り「興味」を挙げたものが 18 人と最も多かった。表 4 はその内訳を示したものである。詳しく見ていくと、その内容は多様である。ロシア人との交流体験や、ロシア語の将来性を挙げる者がいたのは、ロシアとの関係が深い富山県の特徴であろう。あるいは、ツイッターで目にするロシア語に興味を持ったというケースがあったが、これは非常に現代的である。スマートフォンの普及に伴い、学生と世界の距離は縮まっている。彼らはスマートフォンを用いても簡単にロシア語のサイトにアクセスすることができる。ロシア人アスリートのツイッターを閲覧している者もいるほどであるから、学生が持っているロシアへの興味を掘り起こしていけば、それは学習の推進力となりうるだろう。今後はより詳細な質問項目を設定し、授業計画に活かしていけるような調査を実施していき

いと考えている。

7.3 授業の様子

教科書「ТЕРЕМОК」は、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能のバランスが重視されていて、各課は、①聞いて繰り返そう ②読んでみよう ③「言ってみよう」④「書いてみよう」という構成になっている。「ТЕРЕМОК」は高校生を対象としているため、平易に進めるように作成されているが、文法項目の学習進度は速く、大学の1.2年生にあたる4.5年生にとっても、自主学習をしないと授業についていくことは難しい。

授業の開始時には前回の授業で配布した課題プリントを提出させる。その後、これから学習を始める課の単語テストを行う。単語テストは予習として有効であり、授業への導入が非常にスムーズになると実感している。また、課の中心的な学習項目については、パワーポイントファイルを用いて詳しく説明することを心がけている。

動詞の人称変化に進む頃は、アルファベットを歌いながら覚えていた学習初期のように、楽しいだけでは授業は進まない。学生の積極的な授業参加を促すため、文法学習は最小限にして、口頭練習に時間を多く割いている。学生は第1回目の授業で自分のロシア名を選んでいるので、会話練習ではお互いにロシア名を使うようにしている。当初は教科書に書かれているとおりに会話練習をしていたのだが、とてもぎこちない様子だった。そこでどんな会話でも名前の呼びかけから始めるようにしたところ、会話練習時の雰囲気、少し自然になったのである。パターンが決まっている例文通りの会話であっても、自分たちで決めたロシア名を使うことで、他人事ではなく自分自身の会話であると感じられるようだ。当初の目的は数多くのロシア名に親しむことだったが、思わぬ相乗効果を得ることができた。また、流暢ではなくても、友達とロシア語で会話をしたという体験は、学生に小さな達成感をもたらしている。今後も「～できた」という体験の積み重ねにより、学習意欲の向上へと繋げていきたい。

7.4 学習記録が示すもの

授業の終わりには、学習の確認をする目的で学習記録を書かせている。学習記録には、学習項目と提出物、実施した小テスト、そして授業の感想を記入する。感想の部分には、一言、二言ではあるが、学生の気持ちがよく表されている。年度当初には「楽しい」などの肯定的な感想が多いが、授業進行に比例して「難しい」、「変化が多くて混乱する」、「単語を覚えられない」、「テストが怖い」など、不満とも愚痴ともつかない、否定的あるいは消極的な感想が増えていく。

授業中の態度からはそういった印象をほとんど受けず、どちらかと言えば楽しく取り組んでいるように見受けられるのは、7.3 で述べたとおりである。しかし、前期も半ばを過ぎる頃の学習記録には、学生の負担感の大きさを示す記述が多くなる。一見矛盾しているようだが、どちらも学生の姿を表している。この理由としては、5.1.2 で述べたような、良い成績を取ることに對して関心が高いという傾向が「理系」の学生達にもあるためではないかと考えられる。

7.5 今後の課題

7.2 で紹介した選択動機調査で「将来性」を理由に挙げた者が2名いるが、これは両名とも商船学科の学生である。彼らの職業選択肢の1つとして海上保安官という職業があり、近年の日本領海をめぐる情勢の変化に伴い、海上保安業務におけるロシア語の重要性⁽¹⁴⁾が増してきているためと考えられる。たとえ少数であっても、このような学生の存在は、「理系」学生を対象とするロシア語の授業計画構築において大きな意味を持つ。今後は、学生がロシア語の実用性を実感できるような授業にするため、前掲の大阪大学の事例[林田 2013]を研究し、専門性と学習内容をリンクさせることを考えていきたい。学生が自己実現のために学習しようと思える。そんな教材を授業に取り入れることで、7.4 で示したような学生の負担感が減り、学習の動機づけを高められることが期待できる。簡単な作業ではないが、新たな教材作成を目指したい。

今回の調査で、電子情報工学科学生の回答にはロシア語の将来性を示すものはなかったが、社会の動向を調査し、エンジニアとして巣立っていく学生がロシア語学習に将来性を感じられるような情報を提供していくことも併せて今後の課題としたい。

8. おわりに

以上、射水キャンパスのロシア語教育について、国際ビジネス学科と「理系」学科に分けて現状を紹介するとともに、それぞれの課題について述べてきた。学生の多くは、消去法ではなく積極的な理由でロシア語を選択している。それは富山県が持つ地域的な特殊性に起因するものだったり、ロシア語やロシア文化に対する興味だったり様々であるが、現段階ではこれらは学習の推進力となりえていない。それはロシア語の学習が、学生の興味や将来の希望とはほぼ関わりを持たないまま進むためと考えられる。学

⁽¹⁴⁾ 選択動機に将来性を挙げた学生によると、海上保安庁の方から「ロシア語は使えると聞いた」ということだった。

生を自発的な学習者へと導くためには、授業でロシア語を学習している延長線上に、学んだことを活かせる場面があると示すことが重要である。それが私達に求められている課題であることを認識し、これからもロシア語授業に取り組んでいきたい。

(富山高等専門学校)

参考文献

- 山本有希・宮崎衣澄 2012 「大学間, 高等学校ー大学間 ロシア語教育ネットワークの確立」2012 年度 研究成果報告書 科学研究費補助金 基盤研究(B)(2011-2015)、37-44
- 横井幸子・林田理恵 2013 「内容を重視した外国語教育のカリキュラム開発と指導についてー第2 外国語としてのロシア語の場合ー」『ロシア語教育研究』第4号、57-73
- 宮本友介・横井幸子・林田理恵 2014 「日本のロシア語学習者の動機づけについてー期待・価値理論に基づく考察-」『ロシア語教育研究』第5号、13-20
- 金子百合子 2014 「あなたはなぜロシア語を勉強しているのですかー全国 6 言語アンケート調査結果から届くロシア語学習者の声-」『ロシア語教育研究』第5号、21-41

The Current Status and Issues of Russian Language Instruction at the Imizu Campus of Toyama National College of Technology

At the Imizu Campus of Toyama National College of Technology, the students are required to study one of the Japan Sea Rim Languages – Chinese, Korean, or Russian, in addition to English. This paper describes the Russian Language Program offered at the campus and discusses several issues the program are faced with.